2550

宇都宮ロータリークラブ会報

人類が私たちの仕事　50周年を迎え、新たな初心を

2001～2002年度 R.I.会長 リチャードD.キング　2001～2002年度 会長 上野泰男
第2550地区ガバナー 田村春夫　2001～2002年度 幹事 中島理

■例会日 金曜日12時30分より ■例会場 宇都宮ロイヤルホテル 宇都宮市江野町11-16
■事務所 宇都宮ロイヤルホテル 530号室 TEL 028-632-0530 FAX 028-632-0560

(2001) 平成13年11月16日 No.2479回 2001～2002年度（第18回会報）
会員数 133名 出席者 71名 出席率 73.0％ 前回修正出席率 77.0％

MU

斉藤治郎、真下 進、佐藤行正

ビジター紹介（海老沼猛親睦活動委員）

島 遼伍様（ゲストスピーカー）

ニコニコBOX委員会（真下 進副委員長）

快出席：金沢 力

結婚祝：佐藤行正、平 利行、真下 進

奥様誕生祝：長谷川 正

高橋俊雄：第一生命が念願の「日本経営品質賞」を受賞しました。これもひとえに皆様方の御支援のお蔭です。ありがとうございました。

プログラム紹介（青木直樹プログラム委員長）

本日、来ていただいている歴史作家の島遼伍先生は、宇都宮生まれで氏家高校から大正大学文学部にお入りになり、芸術祭の文芸賞、創作部門、或いは宇都宮市民文芸部門やら多くの賞を受賞されています。著書には、宇都宮市、宇都宮に関わる事柄をお書きになっていますが、『改易の城』という宇都宮城炎上の話しや『戦国関東名将列伝』等があります。今日は「イスラム原理主義と北条時宗」というテーマでどのように両者がつながるのか興味深い話がきけると思います。

卓 話「イスラム原理主義と北条時宗」

歴史作家 島 遼伍 様

1980年代、アメリカのCIAが21世紀を予想し世界の三大がんを定義づけました。1つ目がイスラム、2つ目がエイズ、3つ目がドラッグです。今話題のタリバン、アフガニスタンを本拠地としているイスラムグループはイスラム教とドラッグに関わっています。タリバンのもう一つの罪は、今年2月、世界遺産にも登録されていた貴重な仏教遺跡『バーミヤンの大仏』を破壊してしまったことです。私としては当然仏罰があたったと考えています。ウサマ・ビンラディンもアメリカによってもうそろそろ捕捉されると思います。

今日お話しする古典イスラム原理主義が全盛であった時代に、栃木県の雲巌寺は弘安6年（1283）、あの北条時宗によって中興開山されました。それ以前は、寺院としてはほとんど形を成していませんでした。当時、初代の住持さんに高峰顕日さんという方がいらっしゃいました。この方は非常に家柄が良く、後嵯峨天皇の第2皇子という血筋です。高峰顕日さんは無学祖元の直系のお弟子さんでした。無学祖元とは中国は南宋の生まれ、北条時宗により密使を派遣され日本に来た人です。彼により開かれたのが鎌倉の建長寺です。その無学祖元の後継者はこの高峰顕日しかいない、ということで彼は臨済宗の管主という地位に着きました。これにより、雲巌寺の寺格が非常に上がり、室町時代に設けられた五山・十刹制度の十刹寺に雲巌寺は選ばれています。江戸時代には雲巌寺は年賀に際し将軍家特例、白書院特例という破格の待遇を与えられました。この雲巌寺隆盛の時代をグローバルに見ていきたいと思います。

中国では大元帝国が支配していた一方で中央・西アジアではヨーロッパ、東ローマ帝国連合軍VSカリフ朝ペルシャ、セルジューク朝トルコという構図でイスラエル周辺で激戦をくり返していました。イラスムという宗派で主流派と言われているのがスンニ派、次がシーア派、イラン・イラク戦争はこのシーハ派とスンニ派の宗教対立・宗教戦争でした。やがてイスラムの方でもカリフ朝のペルシャとセルジュークのトルコが二つに分かれてペルシャの方はシーア派でした。カリフ朝とトルコ、要するにセルジューク朝、小アジアですが、トルコの南部地方、その辺を今度はスンニ派とシーア派がぶつかりました。で、セルジューク派のトルコが主導権を握り、シーア派、要するにカリフ朝、今のイラン、ペルシャの方がだんだん失速してしまう。シーア派はこのままではいけない、我々は弾圧される、と危機感をもち、イスマイルという人がイスマイリ派という教義を作り分家しました。イスマイリ派の教義は要するにアラー、全能の神、ただ一人しかいないと言われている神のアラーの代言者（予言者）であるムハマドの息子であるアリを正嫡として、この子孫がイスラムの指導者になります。スンニ派はそういう教義

卓話予定

12月 7日 「クリスマスのお話し」
ワレジャン カトリック松ケ峰教会主任司祭

1．真実かどうか　2．みんなに公平か
3．好意と友情を深めるか　4．みんなのためになるかどうか

会報委員 菅沼 輝男 会員
写 真 柴崎 直彦 会員

ではなく合議体制のため、アリの子孫だけでなく長老級の人だったら皆で合議しようじゃないか、という訳で弾圧し始める。この弾圧に対抗し立ち上がったのが、1200年代、第一次イラスム原理主義時代のウサマビンラディンと言ってもいいぐらいの男ですが、ハッサン・イ・サバーという男です。彼が創設したのが今の原理主義のルーツとなるニザリ教団であり、このニザリ教団は徐々に中央アジア、西アジアあたりで弾圧されていたのですが、抵抗力をつけてカスピ海南岸のカラコルム山系のセルジューク側のアラムート城を占領し、これを本営として、アラミッサ城等4～50の山岳要塞を手に入れ、強力な原理主義王国を築いていきました。英語では暗殺者を『アサッシン』と言いますが、実はこの暗殺を聖戦と称して、英語に定着させたのがこのハッサン・イ・サバーなのです。

書物からハッサンの人柄をいくつか取り上げてみると、厳格を越えた超教条的信条論者であることがわかります。例えば、長男が戒律を破ってブドウ酒を飲んだ、というだけで死刑にした。楽器を奏でただけで家臣を斬殺した。自分の妻や娘でも城内に着るものが無くなれば機織りをさせる。

このニザリ教団とタリバンとの相関性は暗殺を肯定したところです。暗殺で人を殺すと天国に行けることを最初に唱えたのがこのハッサンでした。この人は同じシーア派であるにもかかわらず、カリフ朝の王ムスタルジットを殺していますし、その他殺された人達には、エジプトのファーテマ、アイユーブ朝の宰相や将軍、ローマ教皇の枢機卿、ヨーロッパの十字軍諸侯など400～500人といわれています。聖戦と称して暗殺を続けました。

『東方見聞録』の著者、マルコ・ポーロはハッサンを“山の長老”と称し、暗殺法を記しています。まず、ムハマドがコーランで説いたのと同じ天国の様子を城内に再現します。例えば、牛乳・蜂蜜の川、美食の山、沢山の美女たちなど。そこで選抜された10～20人の屈強な若者を楽しませます。その時、ハッサンは必ず大麻（ハッシシ）を若者に吸わせます。（日本名マリファナ）。英語でいう暗殺者「アサッシン」はこのハッシシ（大麻）が転化したものです。大麻で強い幻覚症状に陥る若者たちは現実に戻るとハッサンから「もう一度あの天国に戻りたいなら、アラーのために聖なる戦いである暗殺をせよ」とマインドコントロールして政敵の名を告げ、「それが成功すれば天国へ行ける」と言います。こうしてイザリ教団はマフィアを凌ぐ世界最強の暗殺者集団となっていきました

この頃の大元帝国の総帥はあのクビライ汗の兄、モンケ汗（ジンギスカンから数えて4代め）で、領土は現東欧、ロシアのキプチャク汗国、チベット、ウイグルのオゴタイ汗国、北インド、バングラディシュのチャガタイ汗国まで及び、残る中央アジア、西アジアの制圧にはクビライの弟フレクが最高司令官として20万人の兵を率いていました。この先鋒指揮官のバイジュがイラン進出し、カラコルム山系の途中、ニザリ教団と衝突します。ただ、モンゴルは騎兵が主力で山地攻撃には弱いので、バイジュは配下の将軍キドブバに2万騎をさずけ、歩兵としてアラムート城を攻めさせました。当時の帝位のフール・シャー（3代め）は、険阻な地形に騎馬兵が敗退するだろうとたかをくくっていたのですが、モンゴル側は石弓や爆薬などを用い、兵も2万から3万と増え勢力を増していきました。そこでフール・シャーは和平を提案し、大元使者にアラムート城、ラミッサル城、マイムンディ城などの城壁や塔の一部を壊すところを見せたり、フレグのもとへ自分の子と偽って家来の子をやったりしたのですが、これらをフール・シャーのジェスチャーと見抜いたフレグは激怒し、35万人の大攻撃を始め、攻めること3年、アラムート、ラミッサル以外の城を攻略し、フール・シャーをマイムンディ城で捕え、彼はその後寧夏省ハンガイ山系で撲殺されました。

要するに世界最強の暗殺集団はハッサン・イ・サバーという者によって築かれましたが、これが今のタリバン或いはウサマディンラディンが率いるアルカイーダの源になっているのです。ラディンやオマールは忠実に今もニザリ教団の教えを守り続けている訳です。

モンケ汗の病死後に後を継いだクビライは天下無敵の軍隊を率いて日本にやって来ます。日本は使者を斬るということで文永の役を迎え、この時、神風が災いして元軍は後退します。怒ったクビライは第2次遠征をおこしますが、その時日本軍は元軍の3分の1。防塁を築き抵抗するも、向こうは毒矢を使ったり爆薬などの集団戦できますから勝てません。河野水軍や松浦水軍部隊で夜襲を試みましたが、鎌倉幕府も最後の切り札として関東御家人の派遣を決め、軍を編成し約6万の軍を率いて出撃します。この時総大将になったのが宇都宮の有力御家人、宇都宮三河の守貞綱でした。が、広島県の福山市に着いた時、台風のため元軍は壊滅しました。が、これで終わりではありません。台風があっても多くの人は博多湾の小島に上陸してゲリラ戦を展開していました。そこで貞綱は博多に出撃します。皆殺しを支持する九州御家人に対し、貞綱は技術者たちの命は助けて中国の文化を我々の役にたてようと、助命嘆願をしてかなりの数の人が生き残りました。それが発展していったのが伊万里焼きなどなのです。

また、この時の日本と大元帝国の年収を比較すると、日本は約1兆5千億、大元は約600兆円。兵力は最高動員したとしても、30万。片や大元帝国は450～500万人。神風や内紛があったとはいえ、世界最強といわれた大元帝国の戦いの最後の切り札が宇都宮出身の武将であったということは、我々栃木県人として大いに誇るべきことかと思います。またタリバンによって低迷する経済をいかに克服するか、そのタリバンを破った元を破った武将が栃木県の出身であることを誇りにして、この低迷した経済の活性化に努力することも一つの考え方ではないでしょうか。